

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「“住宅街喫茶戦争”にイオン参戦！」
 - 2) 「アフタヌーンティー・ティースタンド、新店舗が表参道にオープン」
 - 3) 「酒屋改装、カフェ併設...アイデア多様 民間図書館」
-

1) 「“住宅街喫茶戦争”にイオン参戦！」

喫茶業界にイオンが参入し、スターバックスや銀座ルノアールなど既存のコーヒーチェーンにも新業態が生まれるなど、競争が激化している。

「スターバックス」「ドトールコーヒー」などのセルフ式コーヒーチェーンの競争が激化する一方、名古屋を拠点とする「コメダ珈琲店」が、関東、関西への出店を加速。セルフ式にないフルサービスのもてなしでシニア層を開拓し、注目を集めている。

コメダの成功を受けて、追随も相次ぐ。昨年12月に銀座ルノアールの新業態店として郊外型の「ミヤマ珈琲」が参入。そして5月、イオンが東京の葛西店内に喫茶店「CAFE KO-U-AN」をオープンし、喫茶業界に初進出した。

「低迷する外食産業のなかで、喫茶は唯一の成長ジャンル。シニア層を狙い、専門店クオリティのメニューと集いの場を提供する」と、イオンの外食子会社であるイオンイーハートの井上敦夫事業開発部長。30-40代を中心のスタッフには接客マニュアルを設けず、個人の裁量に委ねる方針で、常連づくりのためには世間話も大切とのこと。

専門店に引けを取らない味のコーヒーや豊富な軽食メニュー、充実の雑誌や新聞などは、同じくシニア層を狙うミヤマ珈琲やコメダ珈琲店と多くの共通項が見られる。一方イオンは、タブレットを無料で貸し出すなど、回転率より居心地の良さを優先したコンテンツが充実。このもくろみが的中し、シニア層に加えて主婦やファミリー層まで取り込み、予想を上回る滑り出した。

コンビニ各社がイトインコーナーを設けたり、スターバックスも住宅街に新業態を出店したりと、都心部から郊外にまで広がって過熱する喫茶戦争。ミヤマ珈琲はFC展開を視野に入れる。CAFE KO-U-ANも大阪での出店が決定しており、多店舗化を進める方針だ。喫茶戦争の勝者はどこか。ますます目が離せない。

全国各地に圧倒的な店舗数を構え、そこで「GG（グランド・ジェネレーション）」取り込みを大々的にうたい、明確なコンセプトを持って取り組んでいけば浸透力・認知度はあつという間に広がりそうだ。マニュアルのないサービスにはとても興味がある。大阪にもできるということなので、是非行ってみたい。

2) 「アフタヌーンティー・ティースタンド、新店舗が表参道にオープン」

株式会社ザザビーリーグのグループ会社、アイビー株式会社は、「アフタヌーンティー・ティールーム」の新業態「アフタヌーンティー・ティースタンド」の旗艦店を、2013年10月に東京都・表参道に出店することを発表した。

「カジュアルなティータイム」をコンセプトに、2013年7月、1店舗目を埼玉県川口市にオープンさせたばかりの「アフタヌーンティー・ティースタンド」が旗艦店を表参道にオープンさせる。表参道店は、新しい紅茶の楽しみ方を提案するセルフサービスのカフェで、パブリックスペースをイメージした店内。伝統的な紅茶だけでなく、オリジナリティーあふ

れた豊かなメニューが並ぶ。新感覚のティーラテ「ラティー（LATTEA）」をはじめ、新鮮で上質な茶葉にミルクの甘さやトッピングのフレーバーが加わったさまざまな味わいが揃う。主軸商品の「ラティー」の価格は、ホット・アイスともにSサイズが340円、Mサイズが380円、Lサイズが420円で販売される予定。商品の概要は2013年9月上旬から中旬に発表される。

スターバックスを日本に持ち込みカフェ業界で不動の地位を築いたサザビーが手がけるということで、そのノウハウを活かした店舗を開拓していくと思うと今後が楽しみだ。旗艦店は表参道にということだが、7月にオープンした1号店の出店地が「イオンモール」という点に狙いを感じる。これまで世の中に何度かカジュアルなティーショップが登場したと思うが、はなかなか定着しないイメージがあるので次こそスタンダードになれるのか注目したい。

3) 「酒屋改装、カフェ併設...アイデア多様 民間図書館」

図書館の運営に企業やNPO法人が携わる動きが広がっている。酒店や老人ホームなどを「民間図書館」として住民の交流や地域活性化に役立てたり、ビールや食事を楽しみながら読書ができるようにしたりとさまざまだ。民間の多様なアイデアを反映し、気軽に立ち寄れる場所として人気を集めている。

千葉県船橋市の駅前にある酒店。高級洋酒や日本酒が並ぶ店内の一角に、約500冊の小説や絵本が置かれた本棚がある。街の活性化を目指す地元のNPO法人「情報ステーション」が4月に開設した「酒どっとコム前原図書館」だ。

店の営業時間内なら誰でも無料で利用可能。店を運営する酒類卸会社の役員は「本を借りるついでにお酒や菓子を買う人もいて、来店客が増えた」とうれしそうに話す。

情報ステーションは船橋市を中心に、こうした「民間図書館」を15ヵ所（8月上旬）運営している。酒店のほか団地や老人ホーム、パン店と意外な場所が多い。個人から贈られた古本を貸し出し、ジャンルも幅広い。

手続きや本の整理をするのは、小学生から70代までのボランティア約450人。利用者同士が親しくなり、家にこもりがちな高齢者や子育て中の主婦が一緒にお茶を飲んだり、高齢者が小学生に宿題を教えたりと交流する姿も見られる。

ラジオを流すなど誰もが気兼ねなくおしゃべりできる工夫も凝らし、時にはパソコン教室といったイベントの会場にもなる。情報ステーションの岡直樹代表理事は「学校や会社以外に、地元でつながりをつくるきっかけになれば」と今後も拠点拡大に意欲を示す。

文部科学省によると、全国の公共図書館は2011年度で3274ヵ所と、15年で3割強増えた。ただ、利用低迷に悩む所も少なくない。

レンタル大手TSUTAYAを展開するカルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）に運営を委託し、観光名所にもなっている佐賀県武雄市図書館のような例もあり、民間主導の取り組みへの注目は続きそうだ。

以前より若者の活字離れが騒がれており、図書館が閉鎖すると言う話も耳にする。そんな中このようなニュースは、利用者にとってとてもありがたい。普段利用していない人も、近くに、気軽に立ち寄れる場所があれば足を運んで見ようと思う人もいるだろう。「コンビニ感覚」がハードルを下げ、新たな利用者や足を運ぶきっかけになると思うのでこの取り組みが広がって欲しい。